

の宮<sup>三</sup>條思ひへだてずおぼせなご申させ給へば、御かほに袖をおしあて、おはしませず、ときなりぬと申せど、みにもえうごかせ給はず、内侍御はかしのはこ給はすれば、かみあげてとる、心ちいみじうて、つゝみもあへずまがくしとてさいなむ、水はたてまつればいとたへがたし、この世にてだにまばしやすめよとおほせらる、いみじうかなし、いたく夜ふけてかへらせ給、上達部殿上人さながらつかうまつり給、おなじ事なる御事なれど、御車にておはしましつるを、御輿にてかへらせ給、いみじうめでたし、

〔紫花物語<sup>三十八</sup>枝〕まはすの八日<sup>四年</sup>延久、おりさせ給、<sup>三</sup>條このちかく成てはおもくわづらはせ給て、おりさせ給にいと哀なり、あひもおもはぬなど、弘徽殿の壁に伊勢がかけつけんなどお

もひいでられて、なに事にもめのみとまる、おりさせ給て弘徽殿におはしませして、十六日にこそ、關白<sup>藤原</sup>通どの、おはします、二條殿にいさせ給ぬる、

〔百練抄<sup>二七</sup>條〕永萬元年六月廿五日、讓位於第二親王順仁<sup>六</sup>、先雖可有立坊、依主上御不豫危急、俄有此儀、

〔續世繼<sup>三</sup>花園の句ひ〕廿三におはしまし、御とし、御やまひおもくて、わか宮<sup>六</sup>にゆづり申させ給て、いくばくもおはしませさりき、よき人はときよにおはせ給はで、久しくもおはしませさりけるにや、末の世いとくちをしく、みかどの御くらゐはかぎりぬる事なれど、あまりよをとく

うけとりておはしませしけるにや、又太上天皇てうにのぞませ給つねの事なるに、御心にもかなはせ給はず、よのみだれなほさせ給ほどといひながら、あまりにはべりけるにや、よくおはしませし、みかどとて、よもをしみてまつるときこえ侍る、二條院とぞ申すなる、

〔玉海〕治承四年二月五日丁亥、基輔自内裏退出云、主上<sup>高</sup>聊御風氣御云云、十五日丁酉、晚頭參内、余參御所、謁女房、御不豫事、猶以不快、然而明日行幸、必可、然之由、叡慮一決了、萬人可延引之由、雖